座談會

始まるぞつまる

出席者 A・B・C順

東京産業大學教授 經濟學博士 中山伊知郎

日本製鐵常務 永野重雄

——誌上參加——

日本科學工業聯盟 副會長 池田龜三郎

經濟安定本部 第一部副部長 平田敬一郎

こういう生産全體の低いレベル、それから殊に基礎的生産資材の減産という事實にも拘らず、われわれが現に自分の周圍に經驗している實生活の上では、たいした變化もなしにどうやら生活が營まれているということは、これは申すまでもなく過去のストックのおかげである。われわれは種一足も新調しないけれども、過去から持ち合せているものを修繕しながら使つている。建物は新しく大きなものを建てるわけには行かないけれども、過去のものによつて、これを修繕もしないで使つている。そういうことで今日の生活がようやく維持されている形である。しかし、こんな狀態は、いかに日本の過去の蓄積が大きいとしても、長くは續かない。少くとも、年々生産によつて消耗して行くだけの資本財だけは補充して行かないと、生産力が落ちて行くことは火を見るよりも明かである。またそういう生産設備乃至生産的な機械器具の中には、實際において生産にテムポを合せて消耗率の非常に高いものもある。こういうものを補充しないでおいて、これから先の日本の生産が同じレベルを續けて行くということは、これは到底期待できない。これを補充して日本の縮小再生産を食止める途は、適當ついては、外國資本の導入による外國物資の利用ということでしようが、その外國物資も、早急にはやつて來ないし、また、入つて來ても間に合はないというような狀況にある。そうなると、つまり過去の蓄積がなくなつて來る時期が、物的基礎としての日本經濟というものから見て、一つの危機狀態であることは、これは誰れでも認めざるを得ない。たゞ問題は、過去の蓄積というのがどの程度あつて、それの遣きたところがわれわれの生活の面にいつ現われてくるかという見透しにかゝつているのみだろうと思はれる。現在のところでは、日本の蓄積力は、われわれの考えたよりも大きかつたように見えるので、それが、もう危機が來る、もう危機が來るといわれながら、今日まで日本の經濟力をもつて來た所以であろうと思うのでありますが、どうやらそれも頭打ちがして來たのではないかと思われる。だいたいこの春から夏ごろまでには、そういう狀態が來るのではないかということが一般的に觀測されてゐるように思われる。三月危機というのは、そのような狀態に、ある一つの集中的な表現を與えたものではなかろうか、私はそういうように思つております。

國民に眞相を

記者 いかがでせうか。實際方面からごらんになつて池田さん。

池田 私は一つ、食糧問題に關係して、肥料問題を取上げて見ようと思ひますが、だいたい只今月五萬トン……十月にはじめて超えまして、また十一月からぐつと落ちました。だいたい八千萬人で二千カロリー保つて行くとすると、

窒素肥料として約二百二十七萬トンくらいの計算になつている。これが目標です。これより減つては困取するカロリーが減る。或は外國からもつて來なければならんということになる。今までのように五萬トン、六萬トンでは、年にしてわずかに六十萬トン、そのほか石灰窒素を換算しても、石灰窒素は一萬八千トン、これでは到底足りない。今年二十一年は幸い非常に天候もよくて、收穫も多かつたけれども、來年二十二年この通りになるかどうか分らない。いまからどうしても肥料の用意をしなくちやいかん。なぜそんなに肥料がいけないかというと、やはりこれは石炭と輸送關係であります。ところがいま鋼材・石炭、兩方から計畫を必要とされておりますけれども、このまゝですと殖えるどころか、むしろ減つて行きはしないかと思われる狀態であります。從つて、いま政府としても最重點をおいている肥料がこういう狀態ですから、そのほかの方は非重點主義になることはもちろんであります。一般の産業からいうと、或は鋼鐵も、さつき鋼材三十萬トン乃至二十五萬トンといわれますが、今度の賠償でパールは全部撤去されることになつております。撤去されんでも、いまのまゝ生産を續けて行きますと、染料や醫療學品はほとんどできなくなる。そんな

既に機は熟

一割解の不

しかこの前の鳩時報會で、社會黨の西尾氏が總理の施政方針演說に對する質問演說の中ではじめて使われたのではないかと思います。つまりこのような狀態で放つておけば、日本は三月ごろには非常な危機に見舞われるというような警から、施政方針の具體性がないという點を責められたものと記憶しております。問題は三月とか四月とかいうような時期の問題だけではなくて、つまり春ごろになると日本の經濟に一つの危機が來るのじやないかということは方々で感

その見透しだと思うのです。

終戰以來の日本の生産は、農業産はなるほど八〇%とか九〇%というような生産を擧げておりますが、工業においては二五%乃至三〇%つまり昭和十年から十一年の平均に對してそのくらいの生産しか擧げていない。安定本部で出した工業生産の指數によりますと、昭和二十一年の一月から三月までを百とした生産指數の基準に對して、この七月には二一六、だいたい二倍强、十月にも二百いくらというような二倍强の數字が出ていつておりました過去の生産力に較べて非常に低い。たとえば昭和十六年の鋼材の生産高は四百五十萬トンばかり、それに較べて、かりに三十萬トンとして十五分の一にしか達していない。この二十五萬トンや三十萬トンの鋼材の量というのは、普通の年ならば、石炭山が消費する鋼材の總量に匹敵するくらいのもので、あとは鉛一隻もつくれないし、レールの數さ番えもつきない。一切の鋼材を基礎とする建築その他のこともストップするというような狀況にある。

千三百萬トン・ソダス・アルクアIというようなところにおいて來ましたが、いろ〳〵な事情があつて、二百萬トンを超えてきたのはようやく十一月だけである。一月二月というような寒い季節は、例年の經驗によりますと、石炭の生産高はそうは伸びないような狀況にある。そうしますと今年一ぱいの石炭の生産高が二千三百萬トンに達するかどうかということもちよつと疑問だといふところに來ている。石炭が二千三百萬トン程度に止まつているということが日本

な問題によつて衝撃される所にある。そんなふうに考えますと、電力問題からみましてもそうですが一月二月が非常に生産が減るのではないか。そうしますと、三月といいませんでも、四月五月になりますと、この生産の減つたものが實際國民一般の生活に響いて來るわけであります。私は只今のだいたいの觀想を考えますと、ちようど戰爭の眞相を知らない一般國民が何となくどうにかなるだろうというふうにやつて來て、最後にこの悲慘な敗戰の結果を招いたのと同樣に、今度もやはり、一般國民の間には、新興の現狀について、その程度の認識しかないのではないかと思います。その點からいつて私どもは、敗戰としましてもわれ

等や電氣器が溢れていた。こういうアンバランスを是正しない限り早晩ストックの結渇を來し、やがて新少再生産の惡循環に陷ることは目に見えています。戰後の物のように出來上つてゆく製糸店や料亭、あの同じ材木でもつて、われ

くなつたわけではない。しかし、あるストックを有用な方面に轉向けることがどの程度にできるか、その可能度を考えますと、過ぎて來年の上半期くらいで、工業に有用に供するストックはほとんど食い潰されてしまうという見方が正しいのではないかと思います。そうなつて來ますと、いちばん問題になるのは石炭で、十一月には二百萬トンちよつと超えましたが、二百萬トンとか二百十萬トンといつたような程度では、これはなかなか次の生産に必要な基礎資材を生産するのに非常に貴が折れる。なかんずく既に中山先生からも御指摘になりましたように、鋼材の不足というものは、今後の生産を遲延して行く上の極めて大きな問題になつて來るのではなかろうか。昨年の三十萬トン（月三萬トン）程度の鋼材では、復興の進行だけにさえ、その面からできなくなつて來る時期が近く來るのではないか、ということが、考えられるわけであります。いまのうちに何とかしてこの生産を取戻さなくちやならん。輸入ができて、その方面から供給が殖えますと、それも一つの解決の方法でありますし、できればそれが一番いいのですが、敗戰後の日本としまして、それを當てにして鋼材の生産を賭るということは、どうも適當でない。やはり日本の國内において、節約するところは節約し、できるだけ生産の過程を簡文簡夫されるような方向にもつて行かなければ、なかなか問題は簡單に片づかないということで、鋼材の生産を少くとも現在の月産に對し二倍、もしくは二倍半くらいの程度になるべく早い時會に上げなければ、石炭の生産に必要な鋼材自體が殖えないという段階に來ているのではないかと思います。そういう意味において、一月から三月までの計畫を立てる上に非常な無理をしなければ、そういつた計畫ができないという段階に來ているのでございます。それからいま一つは、一月から二月頃は一年中の渇水期でありまして、電氣の方に相當程度の石炭を割さなければこれまた産業はストップする。問題は、どうしても生産を遲延するに必要でない方面、不急の方面には石炭の配當を相當思い切つて減らし、それから消費の面に當てられるものはできるだけこれを減らしまして、何とかしてこの際生産を遲延し得るような生産計畫を立てなくちやならないと考えて、いろ〳〵勉強しているわけですが、その面から行きましても、國民生活の上に非常に、たとえば旅客の輸送等現在以上に削りますと、相當の影響を與えることになる。

なおいま一つ、インフレーションの問題としては、財政面の問題が今後はまた一つ、大きな問題になつて來るのではないかと見ております。昨年のいまごろは、主食の不足と、それから戰時中に蓄積されたいわゆる過去の購買力、これが表に出てというこの二つの危機が、非常に日本經濟を混亂する大きな因になつてゐたようですが、最近では、主食の問題が石炭、鋼材等の工業基礎資材の問題にかわつて參り、それから過去の購買力が表れるという問題は、昨年三月の緊急措置で一應ストップされておりますので、この問題はそれほどでないにしても、今後は財政の赤字は一體どういうことになつて來るか、この問題がそれにかゝわつて大きな問題になつて來るのではなかろうかと思います。

記者　今度重油の輸入があるようですが、こういうものは、乾燥に對してどの程度に効果があるものでしようか。

重油輸入の朗報

中山　それは、ちようどいま手元さんからお話があつたように、鋼材を節當り倍にしないと、二十二年度に三千萬トン石炭を割るために必要な鋼材を確保することができない。こういう狀況にある。ところが、日本だけの力でそちらに石炭をそう割いて行く餘裕はないし、かといつて、從來の鋼材のストックを間に合うものじやない。そこへ一ケ月一萬三千キロリットルにせよ、それだけの重油が入つて來て鋼材の生産ができるということは、非常に大きな希望だろうと思うのです。これによつてどのくらい鋼材の生産が確保されるかというと、だいたいこれは計算ですから、その通りになるかどうか分りませんが、現在の二萬二千トン程度のものは勞働者の數や工場設備に支障さへなければ、少くとも倍にはなる。これは最近の細かなニュースであつて、縮小再生産を食止める一つの手段がそこに與えられた、というふうに考えていいのぢやないかと思います。しかし、それが十分かというと、やはり十分ではない。今まで日本の鋼鐵は、銑鉄鋼のように、基礎的な資材の中の基礎的なもの資材といつても加工した資材もあるが、たとえばパルプのような、そういうものでなく、パルプに對して木材というような原々資材の減産では、昭和十五年程度まで、だいたい五〇%くらいは輸入であつた。そういうような國で、生産の復興を前の通り或は前の六割とか七割とか、とにかく今日の國民が成る水準を維持して行けるだけのものを作つて行こうというためには、相當大きな輸入が要る。けれども、それだけの輸入が今日の日本に許されるとは、ちよつと考えられない。その意味において、いま言つたようなことは、いわば縮小再生産のスパイラルを この邊で食止める一つの重要なポイントス

すが、これをどういうように使うか使わないかということは結局日本の経済それ自身のやり方如何にかかわるということになる。

長野　連合國の好意によつて、鋼鐵用重油の輸入が決定したことは、最深寸前の我國經濟にとつては、まさに晴天の慈雨ともいうべく、この上ない朗報です。一萬三千キロリットルの重油によつて月々鋼材二萬數千瓩、うまくゆけば三萬瓩程度の增産が可能でありますから、その增産分を挙げて石炭部門に投入し、更にこれによつて增産された石炭を、また鐵鋼部門に戻るといふ、いわゆる「雪だるま」方式こそ、機大再生産への唯一の活路であることを、われわれは信じて疑いません。別個その他は十分持つていますから、雲分原料にこと缺くことはありません。燃料さえ入れば、即座に製品化が可能であります。經濟關係者は、その双肩にかけられた責任の重大さに、胸を躍らせながら、いま重油受入の準備に萬全を盡しております。しかし、このいわば經濟回復への新い水をして最も効果あらしむるためには、鐵鋼業にとつてなおいろいろ殘されが問題もないではありません。それは、例えられた重油の最も効率的な使用、すなはち優秀工場への集中の問題であり、次に鐵鋼價格の問題、電力增産の問題、食糧增産の問題等でこうしたことを同時に解決してゆくことが、西側の不可缺の要素であり、やがては、連合國の好意にむくいる道でもあらうと思います。

ドイツのインフレ對策

中山　そこで經濟全體として、こういう經驗した敗戰によつて資材を消耗しつくしたような經濟を復興してゆく途は、どうしたらよいか。これは、關係的な答を出せば誰でも一致するやうに、やはり資本を蓄積していかなければならぬといふことになります。資本がなくなつてしまえば、近代的な生産力がいつぺんに落ちてしまうことは、明白なので、資本がない場合に例がかりに毎日十五時間づつ働いたとしても、資本があつた場合に七時間か八時間働いただけの能力が挙げ得ないことは明白である。そうすると問題は、日本がこのような事態の下でどういう風にして必要な資本を自分で蓄積して行くことができるかという、經濟的にはこの點だけにすべての問題がかゝつて來ると思う。たとえば敗の戰後にドイツはどうして復興したか。ひどいインフレーションではあつたけれども、生産は決して落ちていなかつた。インフレーションという經を通して資本の蓄積が行われた。これはしかし、勞働關係の特性においてもありますから、今日の日本では決して敢行すべき事態ではない。それは明白ですけれども、とにかくドイツはあのインフレの中で生産が興つた。しかも資本の蓄積が行われた。たとえば一九二四年、インフレーションがその一番絶頂に達した時分に、一兆マルクが一レンテンマルクに切替えられて、ドイツのインフレーションがおさめられて來るあの時分に、うんと高い勞銀を得てをつたような勞働階級が實際の生活程度においてはどうなつていたかというと、やはり平均して戰前の四〇%に下つている。ということはあのインフレーション過程を通じて、何とかかんとか云ひながら、ドイツの産業は資本を蓄積したということです。むろん外資の輸入も大きな動力であつたに違いありませんが、その輸入した外資つまり外國物資を十分に使いながら、ドイツの經濟が立ち直つて行く役割をした。これがなかつたら、ドイツの復興というものは考えられない。

ソ連のインフレ對策

中山　それからもう一つ、全く混つた形で戰後の復興をやつたソ連はどうであつたか。あれは第一次五ヶ年計畫、第二次五ヶ年計畫といつたあの五ヶ年計畫の一番の眼目は、生産の主力を資本財の生産にふり替えた。消費財特に國民生活に必要な消費財の生産さえも、それを減る程度食止めて、つまり國民には相當低い生活程度に我慢してもらうことにして、そうして資本財の生産に全力をつくした。これがあのやり方であつて、結局ソ連はソ連なりに、あの體制の許す範圍で、あの體制の許す形で、それを成し遂げて、後に大きな生産力を蓄積することができた。技術をもつて來ようが、何をもつて來ようが、それを活かして使うためには資本の蓄積が必要なことは資本主義國だつてソ連だつて少しも事實は違わない。だから日本も何らかの形において、資本の蓄積ということをやる體制をつくつて行くのでなければ、……そして今日のような荒廢した、消耗しつくした經濟社會において資本の蓄積をやつて行くためには、生活を下げるより仕方がない。生産力の中で國民生活に向う部分を、直接的には一時的にもこれを引縮めることによつて、資本蓄積をやつて行くよりほかには仕方がない。ところが日本では、この二つの途の何れも、現在とりにくい狀況にある。第一インフレーションによつてやつて行こうとしても、日本のインフレーションというのは、先刻平田さんのお話にあつたように、その原因は食糧不足にあつたり、或は財産税からの逃避逃亡というようなところにあつたり、いろいろな事情があつて、インフレーションによつて賑わつているところは、被過部面特に部面實的な被過部面であつて、生産的部面ではない。むしろ日本のインフレーションは生産をチョックしているというような狀態である。このインフレーションが野放図になることによつて、果して資本の蓄積ができるかどうかということは、相當疑問である。尤も思い切つて自由經濟というように向けて行くことができるかというと、この點まだ現在の體制の下においては、相當の困難が豫想される。こうなつて來ると、P本が自力で資本蓄積をやつて行く可能性というものは、非常に少いのではないか。その意味で私は、外國物資の導入ということが、呼水以上の力で働くようにならないと、日本の經濟が立直らないことになるのではないかという危惧をもつてをりますが、しかしまた、場合によつては呼水的な輸入を興會にして、日本經濟が非常に活潑に動いて行くことも考えられないでもない。それには、經濟問題だけでなしに、政治體制とか、國民生活の全體の體制について、もう少し高邁いた、建設的な國で、日本の戰後の狀態がはつきりして來る時期が、近く來るということが考えられる。これがやはり三月危機というものを前提にしている一つの理由ではないか。同時に、先ほどからお話が建設の方に關つてをつたが、建設をどうするかというような面についても、やはり同じ問題があるということを考えなければならないと思ひます。

長野　先程中山さんも申されたやうに、今度の蓄積輸入も、それだけでは、實は日本の離小再生産を喰止めるための十分な動因とはなり得ないのではないか。危機は深刻であり、敗戰の衝撃は餘りに根底的であつたからです。資源貧困な狭い領土に八千萬の人口を抱えている、ちょうど日本のから極めて端的にいえば、階層の絶滅という言葉に置きかえてもよくはないかと、私は思つています。

記者　大賛成です。

長野　それはとにかくとして、國民全體に公平に犠牲を強いるという、この困難な事業を遂行してゆくためには、極めて強い政治力を必要とすることはいうまでもありません。また先程も申しましたように、この難業に禁々として挑戦を重ねることこそ、外資導入の絶後條件であるといつても差支えないと思います。

麦から夏にかけて

記者　たびいま中山先生からお話が出ました結論の問題、インフレ・ションと勞働攻勢の問題、賃

ふ。そのインフレーションも、原因の點では多少の相違があります。これがストライキその他の勞働爭議というような形になるのですから、インフレーションがだん〳〵進行しているかぎりは、賃上げを中心とした待遇改善のストライキというものは、これはやまないと覺悟しなければならない。そういう意味で勞働攻勢というのは、思想的な問題をしばらく別にしますと、經濟的に見て、これは別に三月危機の特殊の條件をなすのではなくて、いま申した基礎的資材、從つて生產の低調ということの半面なんですね。つまり生產は上らない。しかし一方からいうと、調會の支出の豫算總額は、追加豫算を合せると一千億を突破するという狀況である。しかもそれは二千一年度についてだけ申しますと、前半は少くて後の方で殖えて來る。この暮から二三月にかけて巨大な豫算が放出される。こういふ狀態を見ますと、併わせてインフレーションの危機も二三月頃に來るだろう。そうすると、それに應じて勞働の不安もその時に集まって來る。結局最初に申し上げた基礎的生產資材の生產を中心とする經濟危機が、そういう樣相を徐々に呼び起して來て、それが集中的に、どの春から夏にかけて現われて來るだろう。こういう話になるわけです。

平田　特に三月危機とかいわれてをります方けれども、三月というのは、そういうことを具體的に誇張するための一つの時期を調して言つた言葉であつて、恐らく非常に基礎條件は悪いけれども、一べんに非常な破局といつたようなことには、なか〳〵ならんのぢやないか。それはもちろん政府の施策にもよりますけれども、私は一圖にそう悲觀する必要もないように考へるのです。

しかし基礎情勢がだん〳〵悪くなりつゝありまして、その悪い程度がいまのまゝで放つておきますと、一定の時が經つて從つて、抜き差しならぬ羽目になるということは、考えられますね。たとえば主食の非常な逼迫狀態で、國民生活が苦しいどん底に陷るというような、ひどい狀況は、ちよつといまのところ考えなくてもいい。そこまで行くには或る程度の期間もありますし、やはり政府のやり方がよくて、且つ國民がよく自覺し、協力して、一緒にこの危機を切抜けようというだけの態勢ができて、進んで行くならば、いまのいわゆる危機が危機でなくて、チャンスは、いくらでもあるのではないか。

そういふ意味で、今から悲觀して、何もかもどうにも行かなくなるというように思うのは、少し思ひ過しじやないかと私は感じております。

國民は投げてゐるか

中山　危機が三月に來るかどうかという問題については、私も最初に申上げたように、これは一つのスローガンとして言はれることなんだと思ひますね。私の特に強調して申上げたいことは、つまり前途の見込が少いということなんですよ。前途の見込が少いということは、危機の來ることが徐々であり、またそれはひどい破局という形で來なくても、われわれはもつと悲觀すべきじやないか。むしろ危機が來るかも知れないけれども、たとえば來年の末から或は來年の春からはこういふ風にできるのだ、それまでの間非常に苦しいことがあるけれども、やがてこうなるのだという見込があれば、人間は働ける。經濟危機も乘切つて行けるのですけれども、いまの狀態はそういうような前途の建設的な見込みが立たなくて、たゞ散爭のあとの混亂はどこにでもあるのだ、少し時日が經つたら納まつて行くだろう、納まつたら何とかできるだろうという程度で、これでは心細い。その點を僕は強調し悲觀說を唱へているわけです。だからいまお話のように、政府がよくやつて下さるというなら、むしろ政府で將來でき上る日本經濟の構造や、日本經濟の回復のチャンスというようなものを、具體的に示してくれることが必要じやないか。その點で國民は——われわれよりもむしろ國民が、直感的に日本經濟の將來というものを投げているような氣がするのですがね。

池田　私は中山さんの見方と少し違うのですが、みんながこういう事情が分つて投げているというのでなく、どつちかというと分らないで投げている人は多いのじやないか。よく分つている人は分つているが、これをもつと國民に、いま危機が迫つているのだということを、よく分らして行くことが、一番この危機を救うために必要じやないかと思つてをります。それから、政府の施策というお言葉がありましたけれども、現在勞働攻勢の波に乘つて、たとえば勤勞所得稅は會社が出すべきだとか、國家がこういう稅を取るのはいかんとか、あまり政府に頼りすぎるところがあるのじやないかと思う。この點でけんとうに經濟危機がいま來つゝあるのだということを國民に十分自覺させまして、もつと〳〵政府に協力して行くというような考え方で行けば、この危機を何とか切抜け得るのじやないか。現在私たち仕事をやつている面から見ましても、よく生產業者がサボをやつていると言われる。一部には確かに、手持ちの原料資材の値上りで儲けるとか、また昨今のような闇相場で自分だけの利益を考える人もないではない。しかし事業家というものは本來助平なので、何とか仕事をやりたい、相當生產意欲というものは旺盛だと思つております。これを一つうまく利用して行くことと、更にこの際重點主義を徹底して、さつき申しましたように石炭なら石炭に、他の方面を犧牲にしてもこれに力を傾注することが大切だと思つてをります。

見込さへ立てば

記者　ボーレー案などの發表以來、これでは駄目だというので資にでもなれという風にちよつとなりました。實際あの最終報告の通りに行くのであつたら、なかなかむつかしいと思います。

中山　そういう形で崩壞するというよりも、私の申し上げたのはもう一つ手前なんです。手前というのは、ボーレー案のいちばん嚴しいレベルにさえ、一體日本の生產が達するにはどんな條件が必要か。たとえば鋼材にしても、二百萬トン程度のものが許されてゐるのに、これではとても駄目だといいながら、現在では三十萬トン、七分の一しか行つていない。ボーレー案のあの規模で日本の經濟が立つて行けないというようなショックを受けられたとすると、現在の生產はそれにいく倍も輪をかけたひどい狀況であることに、氣がつかなければならんと思うわけです。私は決して、日本經濟の崩壞を希求するのでも何でもないのですが、單實認識として、賠償案がとができるのだが、何らそういう見込がないにも拘らず、現在は過去の遺產でどうやらこうやら、目前としてあまり變りのないような生活をみんながやつている。少くともそんな氣持でいる。たとえば早い話が、近頃はどこの御家庭でも、一人二人の復員者を抱えているが、或はいろ〳〵な意味で海外から裸になつて歸つた人を抱えている。そうしてみんな割合それを呑氣に考えている。これは家族制度の美點でありましよう。けれども一つの理由は、一軒の家に相當たくさんの人口を養し、狹い部屋の中でひしめき合いつゝ、これは困つた困つたと言いながらこんな狀態はそう續くものじやない、いまにもつと樂になるだろう。また元のように各々が獨立の家をもつてゆつくり暮せる時期が來るだろう。こう思つて割合い呑氣にやつている。ところが、一時的だと思つているのは、生產の勞手とかいうことでなくて、もう少しこういう狀態が續いたら日本國民經濟はどんな狀態になるのだということを、單に數字の組立の上ではなくて、むしろ直感的に、繪にかいたような形で描いてやるのでなければ、日本國民のすべてにこれが分るということにはならないのじやないか。たとえば日本の經濟というのは、ボーレー案によると、いくらうまく行つても日清戰爭の時にかえるのだ。こう言うとびんと來る。そういうような狀態を描いた場合に一體日本の經濟の將來に對して、どういう夢がわれわれに描き得るか。それがはつきりしてくれば、現狀から抜け出すもつと具體的な努力が出て來る。そうでないと、現狀は困るが將來われわれの努力次第で必ずしも悲觀すべきでないと言つているのは、一つの形容詞のような氣がするのですね。

池田　それが分らないから、や

日本にあつた。どうにかなるだろう、こう考へて遂に惨敗を喫した。いままたこれと似たような狀態にある。ほんとうにボーレー案までも行かない。いま銑鐵五十萬トンとか百萬トンとかいうことになつているけれども、三十萬トンでは何分の一だ。そのことがよく分つたならば、私は勞働組合の連中でも、たとえば賃銀の問題で、いま電産の賃銀について批判し合つておりますが、やはり能率給というものがなければいかん、生活給だけではいかんということが分つた。これは生産面からみてもどうしても生産を殖やさなくちゃならん。通貨の施策もありましようけれども、その方面でインフレを防止しなくちゃならんということは相當考える時期になつて來ているのですが、いま先生のお話になつたようなことを、繪にも描けるなら描いて結構やすけれども、數字的にもこれを知らせることが必要だと思う。

もつと苦しまねば

平田　私も中山先生のみんなが投げているという觀測には實は少しまだ考うべき點があるのぢやないかと思うのです。たとえば終戰直後石炭の生産があんなに落ちましたのは、華人或は朝鮮人勞務者の問題があつて已むを得いなと思いましたが、一つはやはり虛脫というような狀態からあゝなつた。その後いく分馬力をかけまして、今日いちばん下つた時から較べると、三倍くらいのところまで來ている。これはいま池田さんがお話しになりましたように、努力次第ではまだ〳〵行く可能性があるのでなかろうか。いまのように石炭が足らないと現實にどういう影響を與えるか、その結果お互の生活水準がどうなるか、或は將來の經濟がどうなつて行くかということが分つて來れば、勞働者にしても企業家にしても、少し考え直してとにかく石炭を生産しようという氣持になり得るのではないか。丁度鋼材につきまして、いま終戰後の石炭のやうな狀況になつているのではないかと思う。これを上げるということはなか〳〵難かしい問題だと思いますが、やはり鋼材生産のためには、先ほども話しましたように、場合によつては旅行も更に辛抱し、その他のいろ〳〵な消費物資の生産に當てられる石炭はこの際しばらく我慢して、鋼材の生産に振り向けるということになれば、これは比較的早く或る程度生産は上り得ると思う。それといま一つは賃銀問題を中心にしまして勞働爭議が盛んにあちこちで行われている。しかしながら勞働者自身も結局生産を上げなければ實質賃銀は殖えない。貨幣賃銀は殖えても、全體のプロダクションが上らなければ自分たちの消費し得るものも結局は殖えないのだ、ということの認識は、最近漸く強まつて來ているのではないかと思う。

將來の問題については、非常にむつかしいのですが、しかし今は困難を耐へ忍んで、最善の手を打つべく努力を續けるならば、國内的にも一應の打開の途は殘されてゐるし、また近く豫想される外國貿易の再開によつて、一層大きな途が開かれるものと思ひます。

それから賠償問題に關しましては、將來の枠としまして發表されたあの枠が非常に嚴しいものであることは、われわれも感じているところで、その點につきましてはいろ〳〵政府としても努力してをられるようですが、こちらの司令部當局は非常にその邊の事情が分つていて、なか〳〵よく考えておられるやうに私ども見受けております。

永野　敗戰後の虛脫狀態とでもいいますか、とにかく今まで無計畫な進み方をして來たのでありますがインフレの問題も結局はそこに原因があると思う。問題解決の鍵は、分配の面より先づ生産の面に求められねばならない。所謂勞働攻勢によつて勤勞階級の收入が增加しましても、生産增加の裏づけがない限り、それはかえつて實質收入の低下を來し、賃金と物價の惡循環をもたらすのみです。

賠償の問題にしても、これではいけないということは、勤勞者はみな殆んど直觀的に感じて居ります。それは數字的な根據をもつ知的な判斷ではなく、むしろ肉體的な感覺によつてそれを知つて居ります。こうした勤勞者の意志を組織化するとでもいいますか、それを大きな叫び聲にまで纏めあげてゆくことに、賠償問題も解決の鍵があるのではないでしようか。賠償に伴う工場施設の撤去作業を豫測して、こゝで甘い汁を啜おうと考へている者が既にちら〳〵見受けられるようでありますが、こういう陋劣的な考へ方は絶對に排撃されなければならない。

それから、國民は投げているかどうか、というお話ですが、私は決して投げていないと思う。最近經營者及び勞働者の間に自主的に盛り上りつゝある「經濟復興會議」の運動は、この意味に於て極めて注目すべき動向ではないでしようか。資本家も勞働者も官僚も農民も、その持てる一切の力と智能を傾けて難局の打開に相協力するのでなければ、經濟の再建も不可能に近いということが段々と分つて來た。沈沒しかけている船の上で相爭うよりも、先づ協力して應急修理にとりかゝらなければならない。どんな犧牲も、それが公平な負擔であるならば、喜んでこれを忍ぼう、こういう氣持が勤勞階級の眞意であると思う。政府は最近重油輸入の問題を契機として、鐵鋼部門への配炭の增加を企圖せられているようであり、擴大再生産へのスタートに就こうとしていることは、當然のことゝはいえ悅びに堪えないところです。政府のこのやり方が一時的な單なるポーズでなく、新しい理念と情熱を以てとり上げられたのであるならば、必ずや民衆の協力をかち得るであい。政府も企業家も勞働者もひつ括めた國民全部がこの現狀をよく把握して、お互に生活のレベルも下げ、苦しいところをだん〳〵生産して行くことがつまり今後の危機を切拔ける唯一の途だということが結局結論になるのではないでしようか。

中山　具體的にいへばいま平田さんの仰しやつたように、外國貿易が再開されて、爲替の問題が事實上解決し、そうして必要に應じて內地に物がはいつて來るような時まで日本經濟を支えて行つて、そのチャンスがあり次第、そういうチャンスをフルに攝んで、これを日本經濟の再建のために使つて行く、これがいま考えられる日本經濟の最大のホープじやないかと思う。その意味で考えた場合に、ら、そういう眼界が開けて來るという意味では、別に全部を投げているわけではないのですけれどもなぜそういふ強い表現を用いて、日本經濟の危機が難ぜられないようなふうに申したかというと、外國との交渉が、實は私が考えてをつた時よりも遲れるのではないかということをこの頃考えて來たのです。

というのは、初めこの三四月にはもう講和條約の豫備交渉でも始まつて、夏頃には講和條約ができるようになるのじやないかという期待をもつていたのですが、現在のいろ〳〵な情報の下では、相當これが遲れるらしい。殊にドイツの場合に、戰犯裁判が濟んで半年くらい經つて、まだ豫備交渉も始まらないというような狀況を見ましい。

という診斷を與えた所以なんです。

しかし、いま安定本部の方からも、非常に將來の明るい希望が開陳せられましたし、實際方面で生産を擔當してをられます池田さん、永野さんからも、決して投げる必要はないという力强いお言葉があつたので、私はむしろ非常に喜んでいる。

そういうような議論がむしろ私のようないわば純客觀的な、冷靜すぎるような觀察に對して起つて來ることを希望したいと思つているわけです。

記者　時間も經ちましたので、いまのお話を結論にして座談會を了りたいと思います。